

## 「横議・横行」の〈場〉として

桂 島 宣 弘 (立命館大学助教授)

「経済思想史研究」とは、どのような研究分野なのか、あまり明確な理解のないまま、この研究会に参加してきた。強いて言えば、経済史畑の研究者と、日本思想史研究者が交流する〈場〉という位の理解ということになるだろうか。だが、今年の大阪経済大学での大会に参加して、それまでの消極的な理解が大きく変わるようになった。すなわち、この研究会は、これまでの学問領域を解体し、新たな学知に挑戦する〈場〉になる可能性を秘めているのではないかと。

言うまでもなく、19世紀以来の「国民国家」が構成してきた近代的学知は、今日大きな動揺を体験している。歴史学の世界でも、20世紀に支配的であったさまざまなグランド・セオリー、近代主義やマルクス主義等々の崩壊・動揺が、深刻な学問的危機を招来するに至っている。だが、わたくしは、このことを決して悲観的にばかり捉えているわけではない。この危機は、漸くにして、「国民国家」の枠や「発展神話」から解き放たれた、新しい文化の歴史学へのチャレンジが開始されたということをも意味しているのではないかと。そして、それが既成の学問枠を「横議」する性格を帯びていることは言うまでもない。この点からすると、経済学、歴史学、倫理学、社会学等を「出自」とする研究者が集い、それぞれ議論し合った（それも、かなり辛辣に）、この日本経済思想史研究会は、文字通りの新たな学知形成のための「横議・横行」の〈場〉として似つかわしいものになってきているのではなからうか。

印象的な報告を幾つか挙げてみよう。まず、柴田敬の経済学をめぐる八木紀一郎氏の報告。門外漢のわたくしには、柴田敬が戦前から晩年に至るまで、グローバルにはマルクス経済学と近代経済学の「総合」を目指していたこと、殊に1930年代に到達した「共同的全体主義の経済学」が、やがて戦時体制に行き着くことになった経緯は、きわめて興味深いものがあった。柴田経済学の性格は、そのまま20世紀という時代が何であったのかという思想史的な問題を提示しているとの観を有した。一貫して河上肇研究に従事してこられた杉原四郎氏の『貧乏物語』をめぐる講演からは、その影響が広範な層に及んでいたことと並んで、実はそのマルクス主義経済学の思想的土壌に、儒教的な大学八条目が存在しているとの指摘を受け、あらためて近代日本の知識人の知の特質について考えさせられた。儒家経世論を、儒者の現実解釈として読み出そうとする宇野田尚哉氏の報告は、これまで一般に行われてきた近代的視点の無前提的な持ち込みに対する懐疑から生まれた方法的報告であった。大塩中斎研究を取り上げた荻生茂博氏の報告も、同じく陽明学や陽明学左派に対する眼差しが、実は近世から近代にかけての日中両国における錯綜した「共同の」創作によって生み出されたものであることを指摘したもので、実に「破壊的」なものであった。手島一雄氏の解放令をめぐる大蔵省案と内務省案の背後に、近代日本の部落問題の起点を捉える報告も含めて、総じて、近代において作りだされた視点が、無前提的なわれわれの知的枠組みとなっていること、その問題性が、今それぞれ「出自」を異にする研究者の「横議」によって炙りだされ始めたこと、今年の大大会はこのことを鮮明にしたのではなからうか。